サルー
Salud!★ 23 号
2017 年３月８日

●キューバ友好円卓会議　通信
e-mail：cuba.entaku.0803@gmail.com
FAX　03－3415－9292　　http://cubaentaku.web.fc2.com/
〒157-0073　東京都世田谷区砧 8-15-14-101

目次　■フィデル・カストロ追悼特集…1　■サンタクララの CHOY さんからのメール…10　■16・10・22 キューバ友好フォーラム「専門家がゆくキューバ医療・医学の現場」… 11　■白根全の「キューバの呪い」②…14　■ペレイラ駐日キューバ大使の挨拶…15　■松尾光の「キューバ右往左往」②…16　■ＢＯＯＫ『108 年の幸せな孤独』…19　■キューバ友好の集い報告…20　■ハバナ大学経済学部オマール教授談話…21　■キューバ関連情報…22　■2016 年収支報告…22

フィデル・カストロ追悼特集

写真・村田泰夫

フィデル・カストロ元キューバ国家評議会議長が2016 年 11 月 25 日、死去した。
カストロ元議長が記した足跡はまことに絶大で、その影響は、キューバはもとより世界全体に及ぶ。元議長はいかなる人間だったのか、そして、元議長がその生涯を通じて実現しようとしたものは何だったのか。カストロ時代が幕を閉じたのを機に、改めて考えてみたい。

2006 年５月１日メーデー式典。これが最後のメーデースピーチとなった。

人民を肥やしにした絶対的権力者

フィデル・カストロの「英雄の生涯」

伊高浩昭　ジャーナリスト

1959 年元日のクーバ革命は、20 世紀ラテンアメリカ（ラ米）最大の出来事と位置づけられてきた。その革命戦争を指揮した革命家フィデル・カストロ=ルスが 2016 年 11 月 25 日、90 年の「英雄の生涯」を閉じた。それから３ヶ月、筆者は、世界史にその名が深く刻み込まれた革命家フィデルの「存在の重さ」を考え続けている。本稿は、その中間報告のようなものだ。（以下、クーバを「玖瑪」ないし「玖」で表す）

フィデルの人間性

フィデルは、スペイン・ガリシア州出身の移民で、一代で豪農となった父アンヘル・カストロの２人目の妻リーナ・ルスを母として 1926 年８月 13 日生まれた。東部の現オルギン州マヤリー市近郊のビラーンという農村に豪壮な生家（復元）が史跡として保存されている。裕福な家庭で何不自由なく育ったフィデルは物欲に乏しく、だから腐敗しなかった。それが長期政権維持を可能にした一因だった。

姉、兄、本人、弟ラウール、妹フアーナ、妹、妹の七人兄弟姉妹だが、存命なのはラウール以下４人だけになった。政治的思考に長けていたのはフィデル、ラウール、フアーナの３人で、兄弟は革命家になったが、フィデルと同じくらい気性が激しく、フィデルとは違って商魂の逞しいフアーナは革命後、反革命に転じてＣＩＡの協力者になり出国、今はマイアミで癌と闘いながら静かに余生を送っている。彼女の商才が資本主義体制への訣別を許さなかったのだ。

フィデルらきょうだいは、父アンヘルが初婚の妻と離婚するまでは庶子だった。フィデルは大学生時代にミルタ・ディアスバラルトと結婚し長男フィデリートを儲けたが革命後に離婚。後年 36 歳の時、17 歳だった美貌のダリア・ソト=デルバージェを見初めて同棲、５人の息子が生まれた。だが当時、フィデルには革命戦争中からの同志セリア・サンチェスという聡明な女性が常に身近にいた。フィデルがダリアと結婚したのは、セリアが死んだ 1980 年１月の翌月だった。５人の息子は庶子から嫡子になった。この境遇は、少年時代のフィデルらカストロきょうだいとよく似ている。

フィデルには２度の結婚で生まれた計６人の息子がいるが、他に認知された庶子３人がおり、さらに２人ぐらい庶子がいるとされる。美男子で長身のフィデルは魅力あふれる天性のマチョだった。ハリウッドの有名女優ら美女たちとのロマンスも数知れない。フィデルの渾名は「カバージョ（馬）」。大きな体と長顔と「馬力」故だった。それだけに同性愛を毛嫌いし、差別し弾圧した時期があった。だが男たちをも惹き付けて放さない冒険家、勇者、覇者、革命家として人間味に富んでいた。同時に動物的本能を備えた権謀術数家として恐れられた。

フィデルは勉強家で、暗記力、記憶力が人一倍優れて

いた。数字へのこだわりは執拗だった。聖書、ギリシャ神話、世界文学、歴史、思想、戦略論、経済学、英雄伝などを読みあさり、それが並外れて雄弁な弁舌に現れた。だが文章執筆はさほど巧みではなく、文章家だったチェ・ゲバラと好対照だった。

最高指導者だった間は、共産党機関紙グランマの事実上の編集主幹で、特に自分がぶった長演説を印刷前に修正するのに淫していた。演説を聴いて記事にすると、翌日のグアンマに発言と異なる文言や数字が載ることがしばしばだった。引退後はグランマに「省察」というコラムを書いていた。執筆スタッフを動員しての作業だった。フィデルの偽らない素顔を最もよく知ることができるのは、フアーナ·カストロ著『カストロ家の真実』（2012年、中央公論新社）だろう。

気宇広大な対外政策

フィデルは少年時代にアレクサンドロス大王、カエサル、ナポレオンらの伝記を読みあさり英雄主義を身につけ、これで自身を励まし、大人物になることを夢見た。革命で政権を握るや、小さな島国の権力者であるだけでは物足りなくなり、世界的な革命家の地位確立に勤しんだ。「ラ米同時革命」を掲げ、地元ラ米のほぼ全諸国のゲリラを支援、また玖瑪人ゲリラを派遣した。世界帝国・米国を意図的に怒らせ、巨人ゴリアテの米国がその罠にはまったことから、「抵抗するダビデの玖瑪」の存在はいやが上にも膨らんだ。

1961 年４月フィデルは、米軍の傭兵部隊をコチーノス湾ヒロン浜で撃破するや、気宇広大となり、世界的英雄の地位を目指す野望実現に向かって邁進する。フィデルは同年、フランス軍相手に独立戦争を戦っていたアルジェリアに医師団を派遣、その後、軍事顧問団を送り込んだ。同国を基盤に玖瑪はアフリカ諸国に外交回路を開いた。アジアでは対米戦争を戦うヴェトナムを支援、固い絆を結んだ。

60 年代後半ハバナに「アフリカ・アジア・アメリカラティーナ三大陸人民連帯機構」（ＯＳＰＡＡＡＬ）と「ラ米連帯機構」（ＯＬＡＳ）を置き、３大陸首脳会議を開いた。東西冷戦、米ソ対決、米ソ平和共存、玖ソ対立、中ソ対決、玖中疎遠、第三世界、非同盟運動などを時代背景として、フィデルは「米帝国主義と戦い続ける世界革命運動の指導者」の地位に上り詰めた。

その勲章が 1979 年９月の非同盟諸国運動議長への就任だった。同年７月、玖瑪革命路線に沿ったニカラグア・サンディニスタ革命が勝利、フィデルの非同盟議長就任に花を添えることになる。ニカラグア革命政権は、レーガン米政権が 80 年代に仕掛けた反革命の内戦で疲弊、ダニエル・オルテガ大統領は 90 年に野に下ったが、21 世紀に大統領選挙を経て復活し、現在連続３期目にある。

チェ・ゲバラのコンゴ内戦参戦と、ボリビア革命を目指したゲリラ戦は失敗したが、フィデルのアンゴラ戦争介入は成功。玖瑪軍は 80 年代末、当時の南アフリカ白人政権の侵略軍を撃破。南ア植民地ナミビアを独立に導き、南ア白人政権の崩壊とマンデラ黒人多数派政権の誕生を促進した。これはフィデルの対外政策最大の成果として国際社会から認められている。

フィデルの英雄主義は確かに花咲いたが、その陰で半ば自らの意志で半ばフィデルの狡猾さによって犠牲になったのがゲバラだった。ゲバラについては拙著『チェ・ゲバラ＝旅、キューバ革命、ボリビア＝』（2015 年、中公新書）を参照されたい。

忘れてはならないのは、フィデルの革命支援がラ米に「変革は可能だという政治的希望」を与えたことだ。これが 69 年 10 月のベラスコ・ペルー軍事革命政権登場、70 年９月のサルバドール·アジェンデ社会党首のチリ大統領選挙勝利と同年 11 月のアジェンデ社会主義政権誕生などを招来した。そして、アジェンデ政権は軍事クーデターで崩壊したが、その「複数政党制自由選挙」主義はラ米に伏流水として流れ、ベネズエラの故ウーゴ・チャベス大統領らが主張した「21 世紀型社会主義」となって地表に甦ることになる。

フィデルが国際的な英雄になったことで玖瑪が実物の何十倍も大きくなり、米国は革命体制を潰すことができなくなった。もちろん革命初期の外資接収、農地改革、貧者救済、教育・保健制度、国防・治安維持、指導部確立など一連の政策が革命体制を固め、揺るぎなくなったのが最大の安定要因だった。特に精神の健康（教育）と肉体の健康（保健）の両面を保障したことで、反革命の煽動に惑わされない人民を創ったのが最も重要な要因だった。

フィデルがベネズエラのチャベスと戦略的同盟関係を結び、ベネズエラ原油が潤沢に入るようになって、革命体制は 21 世紀に延命した。敵対政策では打倒できないと悟ったバラク・オバマ前米大統領は、玖瑪革命体制を初めて認め、54 年半ぶりの国交再開に踏み切った。

経済建設に失敗

フィデルの物欲の乏しさは商売向きでないことを意味した。フィデルの経済運営は「武家の商法」で空転、経済建設は失敗した。1991 年末まで 30 年間続いたソ連援助がなかったら、長期政権維持は不可能だった。72～76 年の政経両面のソ連化で玖瑪は 80 年代、発展途上国としては最も平等性の高い豊かな生活を謳歌することができた。

89 年 11 月のベルリンの壁崩壊と同時に「経済相互援助会議」（コメコン）が雲散霧消し、同年 12 月米ソ首脳はマルタで東西冷戦終結を宣言する。ソ連は９１年末に消滅、玖瑪経済は 93 年、どん底状態に陥った。フィデルは 90 年に「平時の特別期間」という名の非常事態を設定していた点で先見の明があったが、人民は極度の耐乏生活を強いられた。

玖瑪は革命体制延命のため背に腹は替えられず、「特別期間」を隠れ蓑に、敵国通貨だった米ドルの合法化、外資導入、自営業認可、観光の基幹産業化などに実験的に着手した。その指揮を執ったのは、革命軍相ラウールだった。経済は 94 年から地味ながら成長に転じた。ラウールは 2008 年２月、正式に政権に就くや、90 年代の実験を踏まえて、今日に続く市場原理導入による経済改革に着手する。

フィデルが病気で倒れ正式に政権を退くまで 49 年も最高指導者であり続けることができた直接的理由は、数ある権力闘争で勝ち続けたことだ。革命戦争中はマエストラ山脈で指揮を執ったが、都市や農村など山岳地帯でない「平地」からの兵站・情報支援がなかったならば戦争勝利はあり得なかった。フィデルは「平地」組を抑え込み、似非革命派を追放、指導部内の穏健派を弾圧、人民社会党（ＰＳＰ＝共産党）と大学生らの「革命幹部会」をねじ伏せて、1965 年 10 月の新生玖瑪共産党（ＰＣＣ）結党に漕ぎ着けた。

革命戦争勝利の最大の功労者の一人は、58 年半ばマエストラ山脈に大攻勢をかけ決戦を挑んだバティスタ政府軍の撃破に著しい功績のあった故ウベール・マトスだ。フィデルは、共産党（ＰＳＰ）の革命政権への浸透を非難したマトスに「反革命・反逆罪」で禁錮 20 年を科し投獄した。マトスは刑期を全うし、マイアミで死去した。フィデルはマトスを一罰百戒主義で長期刑に処し、見せしめのため「巌窟王」にしたのだ。

フィデルは 68 年８月、ワルシャワ条約機構軍（実質的にはソ連軍）がチェコスロヴァキアを侵略すると、国際社会主義を守るためやむを得ない措置として支持、これを契機にソ連と蜜月時代に入った。これを受けて共産党（ＰＣＣ）が芸術を管理・監視する「社会主義リアリズム」を導入、70 年代前半は「灰色の５年間」と呼ばれた。その象徴的な犠牲者が裁判にかけられた詩人のエベルト・パディージャだった。サルトルをはじめ多くの知識人が玖瑪革命体制支持を取り止めた。

フィデルは 61 年末に「マルクス・レーニン主義者宣言」をする。だがフィデルの共産主義は独占的権力維持と共産圏からの援助獲得のための便宜的な手段だった。フィデルには、マルティ思想と反帝国主義に根差す民族主義が大切だった。自分が「玖瑪人民を代表する絶対善」と頑迷に信じ、その「善」を施した。

資本制諸国のメディアは「独裁者」の烙印を押し、フィデルは死と同時に必要以上かつ不公平・不公正に攻撃された。だがフィデル体制があったからこそ革命玖瑪が存続したのであり、これを評価するならば、その前提条件としてフィデル体制があった事実を否定し去ることは不可能だ。フィデルが経済建設に成功していれば、これほどの「独裁攻撃」はなかっただろう。

類い希な権謀術数家

1980 年代半ばソ連に登場したゴルバチョフ政権は「ペレストロイカ」（刷新）と「グラスノスチ」（透明化）を掲げ、ソ連体制の改革に着手する。その改革の波は改革圧力となって中国にも及び、89 年６月北京で天安門事件が起きた。驚愕したフィデルは体制存続の危機を察知、アルナルド・オチョア革命軍中将ら高官４人を「麻薬取引に関与し国家を危険に陥れた」として「反逆罪」で銃殺刑に処した。

これは麻薬取引関与でフィデルを告発しようと目論んでいた米政府に先手を打った恐怖の荒療治だった。米政府は麻薬関係の告発ができなくなり、玖瑪国内の不満派も動きが取れなくなった。当時の内相も投獄され、謎めいた獄中死を遂げた。麻薬問題は 70 年代末に玖瑪に入ってきた。慢性的な財政赤字に苦しむラ米諸国の政府は皆、コカイン資金の魔力に惹き付けられていた。

ソ連圏社会主義の崩壊と「特別期間」に現れた貧富格差は「革命の平等神話」を破壊した。庶民の心には空洞が生じた。それを埋めるためフィデルは、「反共の法王」として知られたポーランド出身の法王ヨハネ=パウロ二世を 98 年に招いた。

来訪に先立ちフィデルは指導部に、「法王の反共主義を理解せねばならない。ポーランドの共産主義は民衆から生まれたのでなく外部から押し付けられたものだからだ。またカトリックは歴史的にスウェーデン、プロシア、

ロシアに対するポーランド人民の認同（アイデンティティー）の砦だった。法王に同意できない場合、反論してはならない。彼は我々の賓客なのだ」と言い含めた。

フィデル最大の政治的作風は、反米主義で国内をまとめる手法だった。だから反米を唱えるための具体的材料が常に必要だった。98 年９月、マイアミ一帯で玖瑪を武力攻撃する可能性のある反玖勢力の動向を探っていた玖諜報機関員５人がスパイとしてＦＢＩに逮捕された。

これはフィデルがご丁寧にもＦＢＩをハバナに招き、マイアミ一帯での機関員による秘密捜査の報告書を手渡したことに起因する。フィデルは「玖瑪を攻撃する可能性のある組織をＦＢＩに取締まってもらいたい」と伝えたが、この時点でＦＢＩが玖諜報機関員らを一網打尽にする成り行きは容易に予測できた。これについては、イグナシオ・ラモネ著『フィデル・カストロ＝みずから語る革命家人生＝』（2011 年、岩波書店）の下巻の巻末解説を参照されたい。

フィデルは５人が逮捕されるや人民を大量動員し「５人の英雄奪回」という反米闘争を展開、これを世紀末から新世紀初頭にかけての国内引き締めに用いた。フィデルが笛を吹けば、権力機構と人民は踊らざるを得ず、一日に 100 万人を動員するのも可能だった。だがフィデルの教育政策のお蔭で思考能力を持つ人民は、動員される度に「子供扱いされている」と感じていた。不満を殺し沈黙することができない者は、反逆すれば弾圧された。自由を求めれば、フロリダ海峡を小舟で越える冒険を選ぶしかなかった。

「５人の英雄」全員が帰国するのは、2014 年 12 月 17 日の玖米首脳による国交正常化合意発表の日まで待てねばならなかった。処刑されたオチョアら４人と「５人の英雄」は、フィデルの権力維持のため生け贄にされた典型的な犠牲者だったと筆者は見る。

フィデルは世紀の変わり目に何度も経済会議を開き、国際通貨基金（ＩＭＦ）、世界銀行などのエコノミストを招いて議論するのを好んだ。フィデルは新自由主義をこっぴどく批判し、「人類共通の幸福（ビエン・コムン）」を目指すべきだと主張した。自然破壊や多くの貧者を生みだし、不幸を招いた資本主義の「死」に対する「生」を強く訴えていた。

一方で蔓延しつつあった腐敗を取締まるため、はみ出し者の若者を集めて「社会的労働者」に仕立て、もぐら叩きのような焼け石に水の反腐敗闘争を展開した。敢えて形容すれば、この若者たちは気まぐれな紅衛兵だった。このような強圧手法も厭わなかった。

フィデルは 06 年７月重病で倒れた時も権力を手放す気はなく、ラウールにフィデル派５人、中立派１人を加えた計７人の集団指導部に政権を「暫定委譲」した。だが体力回復が不可能と悟り、ラウールに 08 年権力を譲った。この政権交代は遅すぎたが、玖瑪経済立て直しのためには天佑だった。フィデルが倒れた時、アベル・プリエト文化相は「外国からの侵略の可能性」を糾弾する著名な国際知識人の署名を急遽集め、400 人が署名した。フィデルが指示したのでなければ、ラウールの指示によるものだったはずだ。

フィデルは引退後も国際政治面の発言を続け、ノーベル平和賞受賞にかすかな望みを懸けていた。革命家、英雄、権力者フィデルは、絶対的権力者であったが故に人道主義者でなければならないと自覚していた。「ヘンリー・リーブ国際医療派遣団」創設一つをとっても明らかだ。「より良いもう一つの世界」を希求し努力するアルテルムンディスタでもあった。だが類い希なる政治的動物で、最後まで野心家だった。

2016 年８月に 90 歳になってからのフィデルは、ハバナ西部シボネー地区の自邸にイラン、ポルトガル、日本（安倍首相）、中国、アリジェリア、ヴェトナムの首脳を迎え会談した。11 月 15 日にヴェトナムのチャン・ダイ・クアン国家主席と撮った写真がフィデルの公表された生前最後の写真となった。

死して貢献

ラウールは 2016 年 11 月 25 日、テレビとラジオの臨時ニュースに登場、「私は深い悼みをもって現れ、我らが人民と我らがアメリカ（米州）および世界の友人たちに、本日午後 10 時 29 分、玖瑪革命の最高司令官フィデル・カストロ=ルスが死去したことを報告する」と沈痛な面持ちで伝えた。この命日は、グアンマ号がメキシコのトゥースパン港を出航した記念日と奇しくも重なった。26 日から９日間の国喪が宣言された。フィデルの遺体は遺言により火葬された。

オバマ米大統領は、「この瞬間、在玖・在米の玖瑪人は、フィデル・カストロが個人、家族、国の方向を変えてしまったことを思いつつ強い感慨に浸っていることだろう。歴史は人民と世界に彼が及ぼした巨大な影響を裁くだろう」と述べた。1953 年７月 26 日のモンカーダ兵営襲撃で逮捕されたフィデルは裁判で自己弁護し、その締め括りに「歴史は私に無罪を宣告するだろう」と言った、こ

の名文句をオバマは踏まえて「裁くだろう」と指摘したのだ。

11 月 29 日革命広場で「人民葬」と呼ばれる国葬が挙行された。広場一帯を埋め尽くした人民と、ラ米・カリブ 18 ヶ国首脳、アフリカ６ヶ国首脳、ギリシャ首相、アジア諸国代表ら要人多数が参列した。米国首席はオバマ大統領の懐刀ベン・ローズだった。

ラウールは、兄でなく同志としてのフィデルに向けて弔辞を読んだ。「フィデルは、貧者の貧者による貧者のための社会主義革命を指導した。玖瑪革命は反植民地主義、反アパルトヘイト、反帝国主義、人民解放、人民の尊厳のための戦いの象徴となった。彼の響きわたる言葉は今日この革命広場で響きわたっている。遺骨の前で不朽の模範に従い続けることを誓う。愛するフィデル、今ここに国家の英雄ホセ・マルティ像と共にある。この場所で半世紀以上に亘り、並外れた苦難の時に集い合い、我々の象徴（マルティ像）を尊びつつ、重大な決定に関し人民に諮問した。まさに我々が勝利を記念したこの場所で我々の殉死者、戦士、英雄的人民と共に〈勝利まで必ず〉とあなたに向けて叫ぶ」。

マイアミで暮らす実妹フアーナ・カストロは、次のように語った。「兄の死は悼むが葬儀のため帰国することはない。私は（1964 年の出国後）帰国したことも帰国する予定もない。私たちは政治的理由で離れ離れになったが、私は肉親としての心は痛みつつも維持しており、肉親の死を痛むのは当たり前のこと。多くの玖瑪人が自由のために闘う場を求めて出国したように、私も亡命し、マイアミに来た。私が立場を変えることは決してない。そのために痛みと孤独という高い代償を払ってきた。私は、いかなる人物の死にも喜んだことはない。肉親であれば、なおさらのことだ。フィデルの妹として肉親の死んだ瞬間を生きている」。フアーナは、フィデルの死に大喜びしたマイアミ玖系社会の「ヘイト歓喜」を批判していたのだ。

骨箱は沿道から見えるように軍用車に積まれ、11 月 30 日ハバナを出発。フィデルが 1959 年１月、サンティアゴからハバナまで辿った凱旋行進の行程を逆に通って、12 月３日、サンティアゴに到着した。市内のアントニオ・マセオ革命広場で告別式が挙行され、ラウールが告別の言葉を述べた。

「我々は玖瑪人民の愛国的信念、規律、成熟に支えられて、祖国と社会主義の防衛を誓う。何百万人もの人民が革命の指導者フィデルの思想継承者として革命護持を誓った。フィデルはモンカーダ兵営襲撃、グランマ号遠征、革命戦争、ヒロン浜侵攻部隊撃破、識字運動、社会主義革命宣言、ミサイル危機克服、アンゴラ戦争勝利などを達成した。〈平時の特別期間〉にはＧＤＰが 34·8％下落し長時間停電に苛まれた。敵の間近でこれだけ抵抗能力を持つ人民はほとんどいない。我々はいかなる障害をも克服してゆく」。

国家評議会はフィデルの遺志で個人崇拝を禁じ、これを受けて人民権力全国会議（国会）は立法化した。

納骨式は12月４日午前６時50分から約１時間に亘って、サンティアゴの聖母エフィヘニア墓地で執り行われた。ラウール以下の革命軍、共産党、政府、国会の要人らが勢揃いし、ダリア・ソト=デルバージェ未亡人、息子ら遺族、外国人招待客 40 人らが参列した。

フィデルの墓は、マルティ廟の近くに設けられ、高さ４メートル、花崗岩製の丸みを帯びた白亜の墓で、後方にはモンカーダ兵営襲撃殉死者の廟がある。周辺には革命戦争戦死者、アンゴラ戦争戦死者らの廟も並ぶ。この位置関係には、「マルティ思想に基づいてモンカーダに始まる革命闘争を率い勝利に導いたフィデル」という意味づけがある。

国歌演奏と礼砲 21 発に続き、骨箱は墓石の中央の横穴にラウールの手で納められた。ラウールは嗚咽を堪えることができなかった。その墓穴に被せられた青い正方形に近い大理石の板には、黄金色の文字「フィデル」。これが唯一の墓碑銘だ。墓の右側には、2000 年５月１日（国際労働者の日）にフィデルが唱えた「革命概念」の文字を刻んだ文字盤が建つ。謙虚・正直・愛他主義などを謳う「概念」を読むフィデルの録音の声が流れた。

葬儀が終わるや政府は、フィデル思想を国民思想として定着させる一大運動を全国で展開。2017 年元日の革命 58 周年記念日に続く２日の革命広場での革命軍と人民戦士の行進にも、フィデル思想と若い世代の結びつきを強める狙いが込められていた。

フィデルは、若者の政治的無関心が反革命故でなく、自分の人生を自分の意志で築きたいという個人主義によるものだと理解していた。フィデルには後継者ラウールがいた。だが自分の後に「ラウール」を持たないラウールは、50 代半ばのミゲル・ディアスカネルに政権を引き渡さねばならない。そのため次期政権を支えるべき若い世代の政治的育成が不可欠だ。

１月末のマルティ生誕 164 周年記念日前夜の松明行進もとりわけ大規模に全国で展開され、若者が主導役を任された。マルティ思想はフィデル思想に結びつけられ、若い世代に植え付けられる。これをもって帝国主義（米

国）と対峙する思想戦略がある。1月 28 日のマルティ誕生日には、サンティアゴのマルティ廟とフィデルの墓の両方に栄誉礼が捧げられた。フィデルの墓には２ヶ月間に 15 万人が参拝した。観光名所にもなっている。

筆者の思い出

筆者が大学１年だった 1962 年 10 月、玖瑪核ミサイル危機が起きた。「英字新聞講読」という授業で、ジャパンタイムズ紙を読みながら危機の推移を辿っていた。これが意識的、組織的に玖瑪情勢に取り組んだ最初の重要な経験だった。以来 55 年、ジャーナリストになって 50 年、フィデルは「強迫観念」のように脳裡に居座り続けてきた。

玖瑪国外の左翼、進歩主義者、知識人、サロン革命家らは、「代理革命」を託したフィデルを礼讃した。だが玖瑪人民は「尊厳」を与えられたが「胃袋と精神の空腹」に苛まれた。この「内外落差」を、玖瑪人でないジャーナリストの筆者は常々考えてきた。フィデルを全体的に捉え、「功罪」を総合的に判断するのは簡単なことではない。

思い出は数多いが、95 年 12 月フィデルが初の来日を果たした折、「東西冷戦終結後の社会主義の存在価値」を質問して激怒させたことが印象深く残っている。フィデルの死で、筆者は「重い取材対象」から解放されたと言えるかもしれない。

フィデルに最後に会ったのは 2010 年９月、船上講師として乗ったピースボートがハバナに入港、船客とともにハバナ西部の会議殿堂に招かれた時のこと。日本人集団との２時間半もの会合を終えたフィデルは一旦演壇を離れたが、戻ってきて場内に向かって日本式にちょこんと頭を下げた。「好々爺ぶり」を一瞬垣間見た筆者は、新鮮な驚きを禁じ得なかった。

筆者が期待するのは、コンゴ遠征中のゲバラがフィデルに書いた書簡、プラハ滞在中のゲバラの日記などフィデルが公表しなかった重要文書が早く公開されることだ。玖瑪革命の真の研究は、ラウールの死後、機密文書類が公開されるようになれば、その時始まることになるはずだ。

いだか ひろあき

ジャーナリスト。東京都出身。1967 年からラテンアメリカ（ラ米）全域を取材。元共同通信記者。2005 年から立教大学ラテンアメリカ研究所「現代ラ米情勢」担当講師。ラ米、スペイン、沖縄、南アなどについての著書多数。最新の著書は『ラ米取材帖』（2010 年ラティーナ社）。最新の翻訳書は『フィデル・カストロ みずから語る革命家人生』（上下、2011 年岩波書店）。

★月刊誌５月号（４月刊行）に、クーバとトランプ政権との関係や、クーバ政治の近未来を分析した伊高さんの記事が掲載される予定。

巨星墜つ、フィデル・カストロ氏が死去

共産陣営では稀に見る清廉さが長期政権を生む

岩垂 弘　ジャーナリスト／キューバ友好円卓会議

キューバのフィデル・カストロ前国家評議会議長が 2016 年 11 月 25 日、死去した。90 歳だった。20 世紀から 21 世紀にかけて世界の共産主義・社会主義運動を率いたレーニン、スターリン、毛沢東、ホー・チ・ミン、金日成、チトーらの亡き後、ただ一人残っていた革命家が姿を消した感じで、まさに「 巨星墜つ」の感を禁じ得ない。カストロ前議長は実に 57 年間の長期にわたってキューバに君臨したが、それを可能にしたのは、共産主義・社会主義陣営では稀に見る政治指導者としての清廉さと無私が、キューバ国民に支持されてきたからではないか。

ゲリラ戦でバチスタ政権を倒す

カストロ氏は、1953 年、26 歳で、同志とともにキューバのバチスタ政権打倒の武力闘争を起こす。元キューバ大使の宮本信生氏の著書『カストロ』（中公新書、1996 年）によれば「米国に隣接し、また砂糖産業の影響をもろに受けたキューバは、二〇世紀中葉、国内的には政治的腐敗、不正義、不平等、対外的には政治的・経済的対米従属・屈辱を特徴とする、『腐った、さらに腐りかけた』社会であった。そして、そこにカストロ・キューバ革命を生む温床があった」という。

この時の武装蜂起は失敗し、カストロ氏も捕らえられて裁判にかけられ、15 年の禁固刑を宣告される。が、蜂起した人たちに恩赦を与えるべきだとの世論が高まり、1955 年、釈放される。その後、カストロ氏はメキシコに移り、ここで再度の武装闘争の準備を進め、1956 年、氏とチェ・ゲバラら同志 82 人を載せたヨットがメキシコを出港、キューバの東海岸に着く。ところが、海岸にはバチスタ軍が待ち構えていて、カストロ側は多数の犠牲を出し、残ったカストロ氏らはシェラ・マエストラの山中に逃げ込んだ。

しかし、この山中でゲリラ戦を展開しながらバチスタ軍と戦い、ついに、1959 年、バチスタ大統領がドミニカへ脱出、ここにカストロ氏らのキューバ革命が成功する。

革命成功後、カストロ氏は、首相、共産党第１書記、国家評議会議長とその時々で肩書きは変わったが、常にキューバの最高指導者であり続けた。2008 年に国家評議会議長を弟のラウル・カストロ氏に譲り、第一線を退いた

が、その後も党機関紙にコラム「思索」を執筆し続け、この国の内外政策に影響を持ち続けた。文字通り、カストロ氏はキューバという国家の代名詞だったと言える。

危機続きの革命キューバ

日本でもフアンが多い。とりわけ私が注目するのは、駐キューバ大使を務めた日本の外交官が、退任後、カストロ氏について好意的な著作を相次いで出版しているという事実である。

最初は、1991 年から駐キューバ大使を務めた宮本信生氏の『カストロ』であり、次いで出版されたのが、1996 年から同大使を務めた田中三郎氏の『フィデル・カストロ ― 世界の無限の悲惨を背負う人』（同時代社、2005 年）だ。同氏はその中で、「『神の器』として『十字架の犠牲』と『ヨブの忍耐』に生き、永遠の世界を凝視する精神の自由で生きる愛と平安の人フィデル・カストロは、一言でいえば崇高な精神の人である」と書いている。

2009 年から駐キューバ大使を務めた西林万寿夫氏も大使退任後、『したたかな国キューバ』（アーバン・コネクションズ）を出版したが、その中でカストロ氏に触れている。

カストロ氏が主導した革命キューバは、成立後、まさに危機続きだった。

キューバ政府が革命直後に米国企業を接収すると、米国は 1961 年にキューバと外交を断絶。これに対抗してキューバが「社会主義」を宣言すると、米国は亡命キューバ人を中心とする傭兵軍をヒロン湾に上陸させた。1962 年には、米国とソ連・キューバが対決し「戦争直前」と世界を震撼させたキューバ危機が起こる。この年、米国はキューバに対して全面的な経済封鎖を断行、これは今なお続いている。

米国による経済封鎖によってキューバ経済は大打撃を受け、深刻な経済不振が慢性的に続く。それに追い打ちをかけたのが、キューバの後ろ盾であったソ連の崩壊（1991 年）であった。このため、米国に移住・亡命するキューバ人が増えた。

「赤い貴族」は存在しない

こうしたことから、革命以来、これまで何度も「カストロ政権は崩壊する」との見方が流布されてきた。しかるに、まだ崩壊してはいない。なぜだろうか。

宮本信生氏は『カストロ』の中で、「カストロ政権はなぜ崩壊しなかったのか」と問い、次のように述べている。

「カストロのキューバ革命の原点は平等社会と対米自主・独立の達成であった。そして、平等社会についてカストロはいわば疑似ユートピア的平等社会を達成した。国民の間の平等であるのみならず、国民と指導層との間の平等でもあった。従って、キューバには赤い貴族・ノーメンクラトゥーラは存在しなかったし、現在もそうである。カストロ指導部は、ベトナムのホー・チ・ミン指導部を別として、かつて存在したいかなる共産党指導部よりも無私であり、清廉であるといえよう」

「カストロ兄弟が別々に居住している住居は、警護こそ厳重であるが、通常の住宅である。旧ソ連・東欧諸国の指導者の贅沢とは比較すべくもない」

「国民は極度の経済的困難に直面し、大いに不満である。……しかし、ノーメンクラトゥーラが存在しない清廉なこの平等社会においては、旧ソ連・東欧諸国に存在したような、一般国民の党・政府指導部に対する妬みや恨みは存在しない。この事実こそ、経済的危機の中あって、キューバの政治的・社会的安定が維持された最大の要因であるといえよう。そして、それはいまも変わらない」

ノーメンクラトゥーラとは、旧ソ連圏で「赤い貴族」と呼ばれた、特権的な生活をする政治家や官僚たちのことである。

また、元駐キューバ大使の田中三郎氏は『フィデル・カストロ ―世界の無限の悲惨を背負う人』の中で「フィデル・カストロは、誰よりも無私の心に生きる人である」と述べている。

さらに、「フィデル・カストロ・ルス。老いぼれた、極悪非道の独裁者か、はたまた理想を捨てない不屈の巨人か。いずれにせよ、虚実を自分の目で確かめたい」と、２度、キューバ行きを果たし、ついにカストロ氏との面会に成功した作家の戸井十月氏（故人。2009 年１月にキューバ友好円卓会議が開いた「キューバ革命 50 年・ゲバラ生誕 80 年記念キューバ友好フォーラム」で講演）は、著書『カストロ　銅像なき権力者』（新潮社、2003 年）の中でこう書いている。

「カストロは無私である。それは間違いない。カストロは、生きた時間の殆どをキューバのために、キューバ人のために使ってきた。そのためならいつ死んでも構わないという覚悟の中で生きてきた」「キューバにノーメンクラトゥーラは存在しない。だから、多少苦しくとも人々はカストロらを支持する」

カストロ執行部が、深刻な経済不振の中にあっても、国家予算の半分を投じて維持してきた教育と医療の無料化政策も、キューバ国民の大半がカストロ執行部を支持してきた一因だろう。西林万寿夫著の『したたかな国キューバ』にも、「多くの人々はキューバの社会主義を信

じている。経済がうまく回っていないことは分かっているが、医療や教育が無料というところが大きい」と書かれている。

個人崇拝も認めず

いま一つ、キューバが他の社会主義国と著しく違う点を挙げておこう。

私はこれまで３回この国を訪れたが、いつも印象に残ったことの一つは、この国の街頭にカストロ氏の肖像写真が飾られていないことだった。銅像もない。かつて私が訪れたソ連、中国、北朝鮮では、国中の至るところに最高指導者の肖像写真が飾られ、銅像があった。あまりのはんらんぶりに驚いたことを今でも鮮やかに覚えている。それは、異様な光景だった。

聞くところによれば、カストロ氏は、自分の写真を街頭等に掲げることを禁じていたという。そのことは、この政治指導者の「清廉さと無私」とつながっているように私には思われ、清々しささえ感じた。

どうなるフィデルなき後のキューバ

フィデルの死去でキューバはどうなってゆくだろうか。にわかには判定できないが、当面は、ラウル・カストロ執行部がフィデルの精神と政治路線を受け継いで国造りを進めてゆくに違いない。問題は、革命を経験していない若い世代の動向だ。この人たちが、これから先、フィデルの精神と政治路線を継承してゆけるかどうか。キューバ政府の関係者は「若い世代に対しては革命教育をしっかりやってきているから心配ない」と言うが……。

それから、今年（2016 年）４月に開かれたキューバ共産党第７回大会で打ち出した経済改革と、米国との国交回復により、国民間の経済格差が広がるのではないか。キューバ革命が目指した「平等」に亀裂が生じた時、国民の団結と社会主義体制が果たして維持できるかどうか。「巨星」の死去で、人口 1100 万人の国・キューバは難しい局面を迎えるかもしれない。

2016 年 11 月 28 日付のブログ「リベラル２１」に発表した原稿に加筆

カストロ元キューバ国家評議会議長の死去に伴い、キューバ大使館を弔問した円卓会議メンバー。右から事務局の杉本茂樹、岩垂弘・共同代表、大賀達雄・事務局長

キューバそしてフィデルとの出会い

仲間たち

「コンパニエロを大切に」と言ったフィデル

松村真澄　ピースボート（写真右端）

2010 年9月 21 日、ピースボート「地球一周の船旅」参加者約 700 名が、キューバのフィデル・カストロ前議長と面会。2時間半にわたる交流会が行われ、カストロ前議長は、国際平和の実現や核兵器廃絶への思いを語った。

キューバは誇りと名誉に溢れていた

2016 年 11 月 26 日昼過ぎ、私はインターネットニュースで、フィデル・カストロ前国家評議会議長死去を知った。10 月 26 日、ピースボート受け入れ業務のためのハバナ滞在から１か月後のことである。

数日間は、キューバ市民の悲しみ、マイアミでお祭り騒ぎをする亡命キューバ人、世界中から死を悼む言葉の数々、今後の米玖関係などが取り上げられていた。

私も在日キューバ大使館を弔問し、涙ぐむ大使館職員といろいろ語り合った。その間、大使館に初めて来るという弔問者も見られ、直接キューバとの関係がなくとも、影響を受けた人は数知れないことを再認識した。

カストロ前議長の広島訪問のパネルが置かれ、2003 年の来日を思い出す人も多かったはずだ。

私がキューバと出会ったのは 2001 年、ピースボート地球一周の船旅にボランティア通訳として乗船したときだった。スペシャルピリオドを乗り越え、キューバ社会は少し安定して見えた。ゲストスピーカーとしてラスパルマス～ハバナ間を乗船したのが、日系２世のフランシスコ宮坂さん、サルサダンサー、ＩＣＡＰ（キューバ諸

国民友好協会）メンバー３名だった。

私はそこで、キューバ革命とその英雄たちを知った。３名が語るキューバは、誇りと名誉に溢れていた。

ハバナでは交流プログラムに参加し、その社会システムとその中で暮らす人びとの人間らしさに驚かされた。道を歩くと、独立の父ホセ・マルティの胸像や、革命を戦ったチェ・ゲバラのポスターや壁画があちこちに見られた。それ以上に記憶しているのが、教育施設や医療機関の壁の片隅に書かれカストロ前議長のサインとメッセージだった。

あるコンピューター学校の壁には、「この時代の若者たちを羨ましく思う（自分はコンピューターを学んでいないので）Ｆｉｄｅｌ」というメッセージのとなりに、数年後に書かれた「もう羨ましくないよ（私も学んだから）Ｆｉｄｅｌ」があった。市民がどんなことをしているのか、直接訪ねて見るのが常だったと説明してくれた。

子どもたちのミュージカル劇団「コルメニータ」と交流したときのこと、ディレクターは、ある公演を振り返ってこう言った。

「フィデルが見に来てくれたんだ。最後の場面で子どもたちがステージから客席に下り、観客のほっぺに落書きをしてまわった。フィデルは護衛を下がらせて、自分のほっぺに落書きをさせたんだよ。目には涙が浮かんでいた」

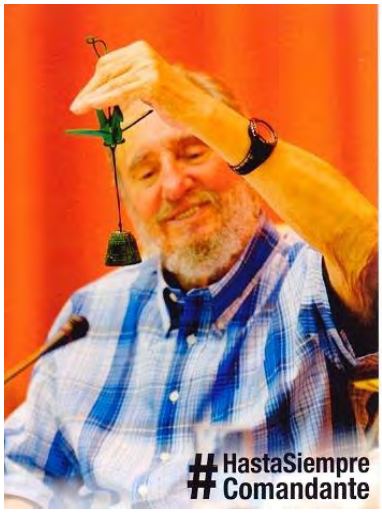
私はその後、ピースボートのフルタイム・スタッフとなり、キューバの港を担当するようになった。キューバを知らなかった若者たちが、革命を知り、そのかっこよさに魅了され、キューバに夢中になっていくのを頻繁に目の当たりにした。カストロ前議長について書かれた本やマルクスを読み始めた学生もいたし、単身有機農業を学びにキューバを目指した若者もいた。

2010 年９月“彼”との会合が実現

カストロ前議長と日本との関係について考えるとき、ヒロシマ・ナガサキ原爆投下は外すことはできない。1960 年夏、革命の同志であったゲバラが広島の地を訪れてから、キューバの誰もがこの悲劇的な歴史と非人道性を学ぶことになった。

中学生の教科書約３ページにわたりしっかりと書かれており、市民が投下日を答えられる。その後、念願かなって 2003 年に訪問し、「何百千万の人々が、あの地を訪れるべきだ。あそこで起こったことを、人類が真に知るために」という言葉を残した。キューバからの公式来日者は、必ずと言っていいほど広島を訪問している。

ピースボートは 2009 年から、ヒロシマとナガサキの被爆者や継承者と船旅をしながら証言とメッセージを各地で伝える「被爆証言の船旅 ～ おりづるプロジェクト」を企画している。船内にて参加者が核廃絶について考えると同時に、各寄港地にて証言を行い、核廃絶のメッセージを市民や行政に伝えている。



私たちと会合したとき、被爆者の方がプレゼントしたおりづる風鈴の音色を聞くフィデル

その取り組みのなか、2010 年９月、被爆者を乗せたピースボートをハバナ港で迎え入れる３日前に、キューバ国家評議会議長室から連絡があった。「“彼”がみなさんを受け入れると言っている」。

面会の懇願書は送っていたが、最初“彼”とは誰のことを言っているのか分からなかった。その後の電話でも、カストロ前議長の“名前”を聞くことはなかった。「“彼”は、会いたいと思っている人だったら、誰でも受け入れるそうです」。

用意されたのは、市内にある立派な国際会議場だった。当日ピースボートの参加者を温かく受け入れてくれた姿は、護衛に手を引かれる“大きなのっぽのおじいちゃん”だったが、話し始めるとその内容は、もうろくとは程遠いものだった。翌日から３日間、機関誌「グランマ」に、会合の様子を省察として綴ってくれた。

キューバでチェルノブイリ原発事故に一番詳しい人

東日本大震災から１年後の３月にも面会は繰り返された。被爆者の方々に加え、福島原発事故の被害者、長年キューバが取り組んできたチェルノブイリ子ども支援の一人者が登壇した。キューバで、「チェルノブイリ爆発事故について一番詳しいのは誰？」と尋ねると、「フィデルだよ」と聞くことが多かった。

国の最高指導者は、国の最高研究者でも教育者でもあり、今後の核拡散に警鐘を鳴らす予測者でもあった。お会いしたとき、１回目の会合に関わったピースボートスタッフによる手作り写真集を渡した。受け取ると、「素晴らしいことを成し遂げるには、素晴らしい仲間がいなくてはならない。コンパニエロ（仲間たち）を大切に」と言った。

また会合数日後、共催のＩＣＡＰ代表には、彼の自筆

で書かれたメッセージカードが届けられ、「日本の素晴らしい仲間たちとの、貴重な時間をありがとう」と書かれていた。最後には、やはり見慣れたサインがあった。今でも強く私のこころに残っているのは、カストロ前議長の人間性なのだ。

いま、キューバは大きな転換期を迎えている。2014年の国交正常化宣言を歓迎した両国は、人の行き来から始まる自由化に乗り出している。開かれた在キューバ米国大使館には、連日ビザ面接を待つキューバ市民が長蛇の列を作る。一方、キューバに流れ込む観光客の数は、観光インフラが追い付かないほどだ。

私が通うこの 10 年、キューバの子どもたちに将来の夢を訪ねると、「チェのようになろう」から始まって、「弁護士になる、医者になる」と胸を張って答えた。今年、同じ質問をすると、ある少年の答えは「トゥリスタ（観光客）になりたい」だった。ハバナで自由に買い物し、モヒートを飲んで踊る観光客に憧れるのも無理はない。これが現代版正常化なのかもしれない。

今年 10 月、ピースボートはキューバへ

嘆いてはいられない。フィデルが亡くなり、トランプが就任した。

１月 25 日、ドミニカ共和国にてCELAC（ラテンアメリカ・カリブ諸国共同体）第５回首脳会議が行われ、この共同体創設の発案者のひとりでもあったカストロ前議長への追悼が行われた。ラテンアメリカの悪影響を危惧する各国代表がラテンアメリカ・カリブ諸国の結束の強化を呼びかけ、最終文書でも強く約束された。

今年 10 月ピースボートは、前議長のいないキューバにニューヨーク経由で寄港する。キューバを訪れる参加者とともに、現状を学び、彼が残した革命の歴史と封鎖との闘い、その人間性は、これからも引き続き伝えていきたいと思っている。

****

第 95 回ピースボート 地球一周の船旅

2017 年８月 13 日（日）～11 月 24 日（金）
横浜発着 104 日間

2017 年８月 14 日（月）～11 月 25 日（金）
神戸発着 104 日間

キューバを訪れて以来、記者として 10 回以上の訪問を重ねてきた伊藤千尋さんほか、女優の東ちづるさん、同志社大学大学院教授の加藤千洋さんなど、多彩な水先案内人が乗船します！

資料の請求・問合せ　0120-95-3740　（受付：９時～18 時）

2016 年 12 月、キューバ・サンタクララのCHOYさんから、加藤玲子キューバ友好円卓会議事務局スタッフに届いた手紙

訳：富田君子

玲子さん　（すべての日本の友人へ）

フィデルの逝去にあたりキューバの人々への哀悼の意を表明してくれたことに感謝します。どうもありがとう。

人間の生の当然のプロセスであり、誰もがどのような形であれ終末にいたるものですが、多くのキューバ国民、外国の友人たちにとって彼の死はとても悲しいことでした。深い尊敬と敬愛を受け、歴史的に傑出した重要性を持った人物でしたので、彼の死は深い悲しみをもたらしました。この終末について適切に要約したキューバ独立の使徒であるホセ・マルテイの言葉があります。「人生という事業をやり遂げた時、死は存在しない」。もうフィデルは物理的には私たちの中にはいないけれども、彼の思想や模範は生きています。

2015 年、円卓会議のツアーでサンタクララの ICAP を訪れた際に、会いに来てくれたチョイさん（右端）。中央の女性はサンタクララ ICAP のイリスさん

この間、彼の遺骨がハバナからサンチャゴ・デ・クーバまで陸路で運ばれて行きましたが、町々には道路に沿って別れをする人々が並び、自然発生的にヨ・ソイ・フィデル「私はフィデルだ」と口々に言っていました。さらに、「キューバ革命」の政治的基本が多くの人々によって再確認されました。これはキューバ国民のこの死へのオマージュであり、革命事業を継続する決意の表明を意味しています。

玲子さん、私たちキューバ人は狂信的でもないし、過激主義者でも、原理主義者でもありません。キューバ国民は政治的・イデオロギー的に高い意識を持ち、真実と正義を識別することができるのです。いくつかの国々の敵方の宣伝にも関わらず、ここではいかなる人に対しても個人崇拝が行われたことはなかったと断言することができます。これこそが最も良い例です。

私たちにとってフィデルは聖人ではありません。一人の並外れた素晴らしい人間だったのです。生涯を通してキューバの主権と自由のために闘った傑出した革命家だったのです。そしてキューバ国民に諸国との連帯と国際主義の精神を促し進めたのです。

９日間喪に服し、その間ハバナやサンチャゴ・デ・クーバの革命広場では式典が行われ大衆が参加しました。もう公的には喪はあけ、私たちすべての人々、キューバの革命家たちの心の中でのみ喪に服しています。国内は普通の生活に戻っています。いつものように新年のカードを送ってください、そうすれば私から友人たちに配ります。

メリークリスマス、2017 年が良き年でありますよう。あなた、家族、日本の良き友人たちに抱擁を。　チョイ

要約文責・井ノ上節子

専門家がゆく★キューバ医療・医学の現場

安田 清さん　　北 潔さん

写真
杉本茂樹

キューバ友好円卓会議は 2016 年 10 月 22 日、東京・日比谷の日本記者クラブ大会議室で、キューバ友好フォーラム「専門家がゆくキューバ医療・医学の現場」を開催しました。

フォーラムでは、長崎大学大学院熱帯医学・グローバルヘルス研究科教授・研究科長の北潔さんが「グローバルヘルスから見たキューバ」、静岡県掛川東病院整形外科の安田清さんが「キューバと日本 医療の違いを考える」と題してそれぞれ講演しました。フォーラムには約 50 人が参加しました。以下は、両氏の講演の要約です。

グローバルヘルスから見たキューバ

北 潔　長崎大学大学院熱帯医学・グローバルヘルス研究科研究科長・教授

グローバルヘルスとは

世界の三大感染症がある。エイズ、結核、マラリアだ。また、振興感染症、再興感染症の分類がある。さらに、開発途上国など貧しい国の感染症、いわゆる顧みられない熱帯感染症（Neglected Tropical　Diseases＝ＮＴＤｓ）がある。今まで、儲からない故に製薬会社が無視してきたが、状況が変わってきた。グローバルヘルスは、20 世紀に出てきた概念。イコール・パートナーシップで、地球を良くしていこう、すべての国が一緒に目指そうというもの。熱帯医学は、19 世紀からあったが、植民地主義的で、労働者の健康確保、本国の人が病気にかからないようにというためのもので、医学中心である。グローバルヘルスは、学際的で、経済学、人類生態学にわたる。資金的には、かつてインターナショナル・ヘルスといった時代は、政府開発援助だったが、今、日本政府、製薬会社（武田・アステラス・エーザイなど）やビル・ゲイツなどが提供している。３年間で 60 億ドルかける。地球規模ですべての人の健康を保とうというコンセンサスが得られつつある。

キューバ医療制度の成果と課題

わたしの専門は、生化学で、生物を科学の言葉で理解するというもの。対象は寄生虫だ。基礎を調べ、クスリを作る。2016 年７月から８月にかけキューバへ行ったが、今回で２度目。以前、パラグアイにＪＩＣＡのプロジェクトで派遣され、アメリカトリパノソーマ（シャーガス病の原因）の研究をしていた。帰国後、標的になる病原体の共同研究を進め発表した。キューバで中南米寄生虫学会が開かれ、誘われて、話をしに行ったのが最初だ。今回、ポリクリニコ、高齢者研究センター、キューバ老年医学協会などを視察した。

キューバの医療制度について言えば、ファミリードクター、いわゆる家庭医といったものが、１万人以上いる。その上で、ポリクリニコ（地区総合診療所）が全国 450 カ所位あり、さらに、病院がある。平均寿命は 79 歳以上。どこに行ってもポリクリニコのシステムがあり、こ

こでの治療で病院に行かないで済むことが多い。あるポリクリニコで聞いたのは、革命以降が長く、寿命が延び、今、糖尿病患者が増えている。足を切断するような患者が、クスリで良くなっているという。

あるファミリードクターを訪問した。大きなアパートの一階で、医師と看護師で、1000 人位を担当している。週２回位巡回する。総合診療医だが、重要な診療分野は、小児科、産婦人科、リハビリ、ということだ。

高齢者研究センターでの話。寿命が延びたことで問題が増加している。認知症や、メンタル面で。しかし、物理的なものでなく、社会的仕組みで天寿を全うさせたいということだ。その資金が必要だという。

キューバは、マラリアやシャーガス病は無い。ジカ熱が問題ということで、医学部学生が蚊の発生している所に殺虫剤を撒くなどしている。デング熱が残っているが、きっちりと予防の仕組みを整えている。

母子院での話では、出産は病院だが、普段はファミリードクターが面倒をみて、自然分娩を勧めているとのこと。問題がある人は、母子院で世話する。老人ホームでは、90 歳の人が歌をうたい、踊りを踊った。すべてステイしているのでなく、家族が面倒を見るのが基本で、自宅で死ぬのが本望と皆言う。

キューバで思ったこと。

１．医療従事者が仕事に誇りを持っている
２．ファミリードクター制度のメリット
３．国外への医師・看護師の派遣
４．先端医療をどうするか
５．創薬とグローバルスタンダード

４について。問題があるとすれば、コストを抑え予防中心にやっているが、世界の医学が進んでいるなか、情報はあるが、移植、手術にしても進んでいない。カルテはまだ手書きで、情報交換はコピーだ。国交回復後、資本主義の典型的な医学算術的な医療が入ってきたらどうなるか心配な面がある。

５については、私の視察目的。ハバナ大学の先生の話では、クスリはいろいろ作って仲間の国へ売っているとのこと。伝統医療、医薬、中国の漢方も取り入れているという。ＷＨＯのお墨付きというが、クスリは、先進国で配布しようとしたら、アメリカの政府機関ＦＤＡ（Food and Drug Administration）を通さないとダメだが、グローバルスタンダードなものをどうしていくかの問題がある。肺結核の良い薬を開発中という。薬の開発には巨額の資金が必要だが、特許の問題をおろそかにすると、次の開発資金が得られない可能性もある。かつて、中国でドイツの人がその辺を尋ねたら、クスリは人民のためにあるといった答えしか返ってこなかった。キューバはどうするか。

キューバは治安が良く、明るく、トランキーロ（穏やか）な雰囲気がある。

キューバが優れていると思うのは、キューバの子ども達は皆、明るく元気だ。生まれた国によって子どもたちの元気さが違ってこないように、というのが、グローバルヘルスの目指すところで、そうして皆が、キューバのように元気なお年寄りになれたらいい。

キューバと日本 医療の違いを考える

安田 清 掛川東病院整形外科／静岡県掛川市

貧しい国なのに……

キューバと日本の医療の違いを考えたい。日本の医療のすべてを知っているわけではないので、私的な考え、考えの軌跡といったところのものを話したい。

日本の医療の問題点として何があるか？ ＷＨＯが認める世界一の長寿国だが、皆保険とフリーアクセス（どこでも受診できる）機関が、これを支えてきた。しかし、これが今、地方を中心に減ってきた。

キューバのファミリードクター（家庭医）は、参考になるか。日本では、全医師が専門医を目指し、家庭医の教育を受けていない。しかし、フリーアクセスできる。アメリカも専門医で、フリーアクセスができない。ヨーロッパは一般医がそれとして教育されるが、診断能力はつけるものの、手術はできない。紹介なしでは、病院は受け付けない。

キューバ革命の原点は、いつでも、どこでも、誰でも医療を受けられるということ。現在、キューバの医師の２分の１は、家庭医。人口当たりで、医師が日本の３倍。３分の１は国外へ出ている。原則、ポリクリニコが病院に紹介するが、直接病院に来ても患者を診る。

わたしは、2011 年１月、全国自治体病院協議会主催のキューバ医療視察で初めてキューバに行った。つぎは、2014 年３月の円卓ツアーで、翌 15 年４～５月ツアーにも参加。キューバ医療の素晴らしさは、次の点にあると

思う。

1．どこでも、誰もが、24 時間、無料で受けられる。
2．予防医学、プライマリー・ケアを重視し、お金をかけずに結果を出している。
3．途上国や被災国に手厚い医療支援をしている。

これらの言葉の前に、貧しい国なのに、という言葉が付く。

前の世代が血を流して勝ち取ってきた医療と教育

２回目のキューバツアーで、ＩＣＡＰ（諸国民友好協会）の副総裁のアリシア･モラレスさんに、「失礼ながら、なぜ、貧しいのに膨大な海外支援するのか」と尋ねたら、「国際主義と人道主義は、革命当初からの方針。他国の人には分からないかもしれないが」という答え。

ＯＥＣＤの調査（2012）では、10 万人当たりの、医師・看護師数は、日本は 220 人と 1010 人。キューバは 680 人と 917 人だ。キューバの人口は、1100 万人だが、４人に１人の家庭医。２万人に一つの診療所。５万人に１つの病院。80 万人に１つの国立病院がある。

ファミリードクターの様子。あるのは、体温計と血圧計、聴診器ぐらい。午前は、診療でプライマリーケア（初期診療）を目指す。午後は訪問で、住民の健康管理にあたる。住民の一人ひとりの状況を把握して、カルテに記載する。母子プログラムも仕事の一つ。決められた時期に自宅訪問をして 13 種類の予防接種をする。結果、根絶された病気に、麻疹や、百日咳、風疹がある。すでに問題なくなっている疾病はＢ型肝炎。25 歳以下の患者はいない。

日本は、予防接種は強制できない。種類により 95%、75%とか 0.5%など。キューバは副作用の問題をどうクリアしているか、次回の訪問で聞いてみたい。

ポリクリニコの様子。医療の根っこになっている。一つのポリクリニコが、20～30 人のファミリードクターを受け持つ。というより、一体になって活動している。医師が 30～40 人いて、日本にしたら大きい。しかし、設備は貧弱で、レントゲン、エコー、心電図、血液検査用器具などだが旧式だ。中は、手作業が多い。カルテは、大学病院の話だが、裏紙を使って、きちんと書かれていた。典型的な疾患 200 の 60%がここで解決できる。

ポリクリニコは、教育機関の役割ももっている。つまり、二次診療、公衆衛生の拠点ばかりでなく、ファミリードクターを集め、インターネットでの最新医療教育などを行っている。医学生も来て診療をやる。医科大学卒業後の産科、小児科、内科などの教育をやっているのだ。

日本では、僻地医療に行く若い人がいない。給料や、交代がないという面もあるが、最大の問題は、最新医療情報から取り残されるということで、10 年経ったら医療はまるで変わってしまう。キューバは、その点で、教育の機会が保障されている。家庭医が医療の原点で、尊敬されている。日本で家庭医は、必要か？ の問題。舞鶴市民病院で、総合医制度を設けた。総合医、家庭医は、診断学。幅広くみんなで診るということをしたら、市民や行政が、専門医を欲しいという。結局、10 人の総合医は全員辞めた。

アルメ・ヘイラス病院の様子。医師 430 人、看護師 500 人。看護師が少ない。紹介率 76%ということは、あとは直接来る。それがいいかどうかは、置いて。最新式のＣＴがあるが、３台と少ない。集中治療室が 30 室だが、古いモニターと人工呼吸器があった。ヘルスツーリズムがあり、外貨獲得している。

ラテンアメリカ医科大学の様子。74 ヵ国から、12500 人が留学している。25 歳以下の貧しい地域出身で、母国の都会外での医療が条件だ。100 ペソの奨学金を支給される。カリキュラムは、キューバの学生と同じ。母国で受け入れられず、キューバに戻る者もいる。地元の医師会の反対に会うという。キューバ医師の海外派遣は早くから始まったが、継続の問題から留学生受け入れが始まったという。こんな国がほかにあるだろうか？

分子免疫学センターの様子。キューバは 500 以上の国際特許を持つという。ここで、肺がんの免疫療法を開発した。キューバの医薬品は、15%が輸入、85%は、原料輸入し、国内製造している。外貨獲得しており、観光産業に次ぐ産業になっている。Ｂ型肝炎ワクチンは、アメリカもこっそり輸入しているという。

キューバからの医師や看護師の海外派遣について。パキスタン地震では、日本のメディアは、伝えなかったが、キューバから 2400 人の医療チームが６ヵ月、104 万人の治療、１万人の手術をした。44 の野外病院のうち 32 がキューバのものだった。250 トンの医薬品も届けた。日本からは国際緊急援助隊の 42 人のみ。阪神・淡路大震災、東日本大震災に行った私も行きたくて、あちこち掛け合ったが、受け付けてもらえなかった。西アフリカのエボラ出血熱には、フィデル・カストロの要請に１万 5000 人が手を挙げ、2014 年、450 人が派遣された。

キューバには「子どもは幸せになるために、生まれてくる」という言葉がある。サンタクララの小児病院は、273 床、医師 200 人、看護師 340 人の体制で、さらに 53 人を海外派遣しているという。

キューバ革命から 56 年。革命前の悲惨な状況を知っている人は少なくなった。医療が無料という状況を当たり前と受け止める世代に、どう理解させているか、15 年のツアーで聞いた。

「教育の中で、前の世代が、血を流して勝ち取ってきたと教えている」とアリシアさん。ソ連崩壊後の特別期を生き延びたのも、教育の力で、キューバだからできたのだろう。

連載 ★ 渡航歴 30 回、滞在日数約２年

白根 全の キューバの 呪い ②

通りの暗闇に浮かび上がった「社会主義か死か！」

ハバナ市ベダード地区ゼロ番地

夜の濃い闇がねっとりと身体にまとわりついてくる。暗いランウェーの向こうに、低い格納庫のような建物が見えた。飛行機から降りた誰もが歯を食いしばり、こわばった表情で歩いている。

その噂を耳にしたのは前の年の春先のことだった。マイアミから不定期で飛んでいるキューバ行きフライトに、ビザなしの外国人でも乗れるという根拠のない怪しい情報だった。ほとんど「カリブ海の北朝鮮」というイメージでしかなかったキューバは、当時アンデス方面に入り浸っていた自分にはあまり縁のない世界だった。半分は怖いもの見たさ感覚だったが、やはりチェ・ゲバラやカストロの存在は気になっていた。

80 年代後半からフジモリ政権が誕生した 90 年代初頭にかけて、ペルー全土で極左テロ組織、PCP-SL（ペルー共産党センデロ・ルミノソ派）による、血なまぐさいテロの嵐が吹き荒れていた。実際に身の危険を感じることも日常茶飯事、コチェ・ボンバ（自動車爆弾）によるテロ事件に巻き込まれ、危うく命拾いしたことも複数回あった。

物騒だし泥臭いアンデス世界に少し疲れ始めていたある日、カリブ海の島々の取材仕事が舞い込んできた。この際ついでに押し込めればラッキーぐらいの軽い気持ちだったが、思いがけずキューバ取材企画は簡単に通ってしまった。あっけなく、台割りの片隅にこぢんまりとキューバの章が収まることになった。

ニューヨークからマイアミ経由でアイランド・ホッピングの旅をスタート。ジャマイカから小さな島々を飛び歩き、トリニダード・トバゴで着地というコースになる。どんな景色が待ち受けているのか、足が勝手にリズムを刻みはじめた。

島ごとに言葉もカラーもまったく異なるカリブ海は、紺碧の空間に散らばる綺羅星のようなリズムを産んだ故郷だ。旧英領だったジャマイカはレゲエにスカ。ナポレオンの軍隊を破ってフランスから独立を勝ち取った史上初の黒人奴隷共和国ハイチはコンパとラシーン。スペインの最も古い植民地だったドミニカはメレンゲにボンバ。アメリカの自治州プエルトリコはもちろんサルサ。マルティニークとグアダルーペはフランスの海外県でズークやビギン。オランダ領アンティール諸島のキュラソーはスリナム起源のカセコかアレケ。英連邦のトリニダード・トバゴはカリプソにソカ、そしてドラム缶の旋律打楽器スティールドラムの故郷だ。

もちろんそのすべての基礎は、黒人奴隷がもたらしたアフリカ起源のリズムだ。地獄の責め苦のごとき日々のなかから生み出された奇跡のような音楽物語が、天空を飛び交う流星群のごとく点在する。人類発祥の地アフリカの人々が本来持っていた生命力が伝えた、始原の大地アフリカの恵みとしか言いようがない。現在、我々が耳にするあらゆるポップスは、この恵み無しには存在し得なかった。強いて言い換えれば、人類史上最大の救いかも知れない。旧宗主国によってそれぞれにキャラが際立つ島々を巡る忙しい取材を、１カ月がかりで終えた。

アイランド・ホッピングの最後に振り出しのマイアミに戻り、キューバへ往復する予定だった。難民フライトと呼ばれているのは、国交がないアメリカ～キューバ間を両国の政治環境が緩んだ時期だけ不定期に結ぶからだ。人道的見地から許可された、65 歳以上の元キューバ国籍所持者

の親族訪問専用という名目になっている。

行きがけに予約を申し込んでおいたチャーター便のデスクでチケットを受領。ツーリスト・カードは日本のキューバ領事館で取得済み。ただし、取材目的の場合はプレス申請が必要となる。親族訪問以外は、報道目的のジャーナリストかキューバ政府が招聘した研究者、国際会議などに参加する学者などしか乗れない建て前になっている。

アメリカ出国時はジャーナリスト、キューバ入国時は取材ビザがないから観光客、果たして入国できるのか定かではない。

チェックイン・カウンターは大手の航空会社が並ぶターミナルの一番はずれ、フライト４時間前にはもうすでに満員だった。クーラーをフル回転させてもまだ蒸し暑いロビーを、何着も重ね着したお年寄りの集団が埋め尽くしていた。満杯の中国製運び屋バッグも、キューバの親戚へのお土産だ。とても裕福そうには見えない人々が、表情だけは幸せの頂点といった明るい笑顔を振りまく。見送りの家族と抱き合うその頭の上には、ニューヨーク・ヤンキースなどの安物アポロキャップがいくつも乗せられている。

騒がしかったロビーとは一変して、機内には堅い空気が立ち込めていた。かろうじて残光の輝くカリブ海上空を南下、１時間ほどのフライトでハバナ到着。首都とはとても思えない閑散とした空港だ。押し黙ったまま並ぶ人々の列の後ろについて、薄暗い到着ロビーへ向かう。入国審査のブースは重い扉の個室で、行列から中はうかがえない。窓口から審査官の顔は見えず、手元だけが薄明るい。ブースの後ろ上部には鏡が斜めに取り付けてあり、中から後ろ姿の全身が観察できるようになっている。モスクワ空港のイミグレと完全に同じ構造だ。

精一杯の笑顔を作りながら、パスポートとツーリスト・カード、ホテルの予約証明書を提出。顔を見せない軍服姿の担当官がパスポートを１ページずつめくり、低い声で入国目的を尋ねてくる。観光で～す、と務めて明るく答えるが、雰囲気は重いまま。背中がじっとり汗ばんでくる。訪問先を聞かれて、ハバナとリゾート地のバラデロ、海がきれいなんでしょ、と言ってみるが反応はない。明らかに私は嫌われていた。いや、私だけではなく、あらゆる外国人観光客は憎まれていた。顔のない審査官はしばらくパスポートをめくり返し、押し黙ったままツーリスト・カードの空欄にスタンプを押した。歪んだ緊張感が急に緩む。ブザーが鳴り、ブースの扉の鍵が解錠された。

再度セキュリティー・チェックを受けてようやく到着ロビーに抜けた。30 本以上持っていたフィルムがひっかかるが、何とか笑ってごまかす。家族の到着を待ち構えている出迎えの群衆をかき分けて外に出たとたん、同じはずの空気がなぜか急に甘くなった。肌にまとわりつく薄絹の重さの空気。官能的ってことねと、バカみたいににやけながらザックを担ぎなおした。

暗く静まりかえった帝王ヤシの並木通りがまっすぐに伸びている。誰もいない通りの暗闇に、フィデルとチェ、そしてカミーロ・シエンフエゴスの顔と「SOCIALISMO o MUERTE！　（社会主義か死か！）」と記された看板だけが浮かび上がっていた（続く）。

キューバの友人の皆さん

わずか数時間前に国連総会で行われた封鎖撤廃決議採決の歴史的成果にたいする全キューバ国民の歓喜を皆さんと分かち合えるのを大変嬉しく思います。投票では2年続けて 191 ヵ国もの国々が我が国に対するこの不正で犯罪的な政策への反対を表明し、今回は米国政府とイスラエル政府が棄権しました。

キューバ外相が指摘したように、国連総会や他の国際会議で彼らがその孤独の票を訂正するのに 24 年もかかりました。それは米国の孤立と失敗の 24 年であり、またキューバ国民の英雄的抵抗の 58 年でした。

歴史的偶然によって、我が国と世界にとって歴史的なこの出来事は、私がこの親愛なる国日本に着任した数日後に起こりました。そのため、このような重要な出来事の機会に、初めて皆さんに長年にわたるご支援に感謝するためのご挨拶をお送りできるのを特に嬉しく思います。

昨日得られた結果はキューバ国民だけの勝利ではありません。我が国の尊厳と独立のための長い闘いで私達に寄り添ってくれた世界のすべての国民と政府の勝利でもあります。

この機会に、国連でキューバ外相が行った演説の文言をいくつかお送りいたします。この歴史的成果はキューバ米国間の関係正常化に向かう過程のなかで得られたものです。そしてそれは、オバマ大統領が新たにキューバに向けて他の緩和策を発表した数時間後のことでした。それらの緩和策は積極的な性格を持つものではありましたが、封鎖撤廃の目的のうえでは極めて限定的なものでした。

私達は希望、あるいは善意の表明を現実と混同してはなりません。このような問題では、事実からのみ判断することができます。そして事実は、キューバに対する経済・貿易・金融封鎖が実施のうえで完全に維持されていることを明らかに示しています。

終わりに当たりまして、この不正な政策の最終的な撤廃まで続く私達の闘いのうえで、引き続き今までにも増して皆さんの支援を得られるであろうと確信するものです。
親愛の抱擁をお受けください。

2016 年 11 月　駐日キューバ大使　カルロス・ミゲル・ペレイラ

しらね　ぜん

日本で唯一、世界中でも２人しかいないカーニバル評論家、ラテン系写真家。東京出身。青山学院大学卒。仕事（撮影取材調査渉外観察記録編集企画制作など）その他（探検冒険踏破潜入縦断横断登攀釣魚沈没など）さまざまな理由で現地に入り浸っている。人類 400 万年の旅グレートジャーニーのサポート、コーディネートも担当。これまでに訪れた国は、６大陸、150 カ国超。ラテンアメリカとカリブ海域の主なカーニバルはすべて制覇。
定点観測と路上観察を続けているキューバは、1989 年以来、30 回目の訪問をマークした。

連載

サンクティ・スピリトゥスで孤軍奮闘

松尾光のキューバ右往左往②

9月、日本語講座開設

アカデミックビザを取得して日本語講座を開設した。9月6日の予定が9月12日に延びる。そのほかの活動も主催者のサンクティ・スピリトゥス大学、「グアイアベラの家」の都合で微修正を強いられるが無事にスタート。在キューバ日本大使館伊藤書記官が講座開設のニュースレターを書いていただきマスコミ向けに公表した。深謝。

前回も書いたが「成績優秀者訪日研修」派遣を2、3年後にサンクティ・スピリトゥスから送りだすのが夢だ。

サンクティスピリトゥスにおける
新規日本語講座の開設

平成２８年８月３１日

９月６日、国際交流基金、サンクティスピリトゥス大学、博物館グアジャベラの家、及び在キューバ日本国大使館（当館）の共同プロジェクトとして、サンクティスピリトゥス大学にて、日本人の松尾光先生を迎え、日本語講座を開設します。同講座は、同大学の学生を対象とし、当面は約２０名の生徒に対して週３回の授業が予定されています。

また、９月６日から、博物館グアジャベラの家において、一般市民２０名を対象とした松尾先生の日本語教室を週３回行います。

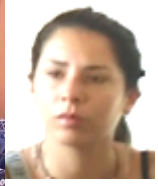
現在、キューバ国内には、ハバナ大学等を中心に日本語講座が開講されていますが、今回の新たな講座開設により、地方都市であるサンクティスピリトゥス市においても、日本語教育・学習がさらに普及することが期待されます。

当館では、日本語教育・学習環境の改善に努めており、例年、「成績優秀者訪日研修」を通じた日本語学習者の日本への派遣や、「日本語弁論大会」の実施、文部科学省の国費留学制度を通じたキューバ人学生の日本留学の実施等を行っています。

なお、各講座の詳細については、サンクティスピリトゥス大学及び博物館グアジャベラの家にそれぞれお問い合わせ下さい。

在キューバ日本国大使館
広報文化班
Tel: (+53) 7204-3355, 7204-8904
E-mail: cultura@hv.mofa.go.jp
www.cu.emb-japan.go.jp

日本語講座の学習者たち



アレキシス君　ロサナさん

レニエルビス君　アリアンナさん

ヤリエリ君　ダニエリさん

ルイスさん　ラマンさん

タニアさん　キンホさん

環境が激変し、多くのキューバ人やキューバ在住の日本人と接するようになった。日曜日だけが休みで、あとの日はすべて教える多忙な日々だ。

クラスの他に音楽指導も（個人レッスンも含む）、学習者たちの希望で行う。彼らを紹介したい。

日本語でお金を稼ぐことが目的の人はいない。田舎ではお金をたくさん稼ぐ手段は無く、貧しい生活を受け入れざるを得ないようだ。

知的興味で日本語を3年間勉強しようとするキューバの人たちが本当にいるのかという危惧は、あまり真面目に考えないようにした。皆おおらかに気軽に考えている。

出入りが激しく、今は25名。来てすぐやめた人たちは5、6人いる。これからみんな続けてくれるのか気がかりだがなるようになれと考えるしかない。真面目な人、優秀な人さまざまだが、みな魅力的な人ばかりだ。写真を交え紹介する。

トニー君　アルベルト君

医学部の学生でアレキシス君、19歳。熱心で物分かりがよいが、学業が忙しいらしく欠席しがちだが当てるといつも正しく答える。日本のアニメ『NARUTO －ナルト－』が好きなアニメおたく。将来は医者なので、日本語は教養のひとつだろう。

建築家のロサナさん。大学を出たばかりと思う。建設関係の会社勤務、日本語を学ぶのが楽しそうで、ほぼ出席。日本語教師の希望がある。若くて明るく美人。建築家のボーフレンドがいる。

大学で歴史学講師のダニエリ（女性）さん。30歳代で小さなお子さんがおられる。楽しそうに講座をうけて全出席。おとなしいが理解が早い。

アレキシス君の友人の医学生で、同様にアニメおたくのレニエルビス君。アニメを描くのがプロ級の研究員ヤリエ

リ君。２人にはピアノも教えている。豪雨で欠席以外は全出席の優秀な医学生のアリアンナさん。日本の歌が好きで、コスプレファンの大学生タニアさん。２人ともとてもまじめな女学生だ。２人には、個人レッスンとして歌を教えている。

60 歳のスペイン文学の文学部教授のラマンさん。じつは年が近く一番親しみをもっている。ちょっと耳が遠いためか、なかなか単語が覚えられない。三島由紀夫、大江健三郎など日本作家の小説をスペイン語訳で読んで、文学の本も出版しておられる。俳句や日本現代詩にも造詣が深い。

13 歳の中学生トニー君と 14 歳のアルベルト君。アルベルト君は、お父様が大学の先生で、ばったりお父様にお会いした。日本にはまっているそうだ。忘れてならないのがルイスさん。日本オタクでプロジェクトの世話人だ。

学習者に助っ人が現れた。２年間、日本で働いた経験があるボリビア人で、キューバで教育学の博士号をとるため留学中のキンホさん。彼もアニメおたく。日本語を体系だって学び直したいとのことで講座に来ている。講座は必ず出席し、私を助けて他の学習者にスペイン語で説明してくれている。

大学生が多く 10 人近く。うち４人は医学生。中高校生も３人。大学講師、教授が５人。あとは働く人たち。男性 18 人、女性７人だ。アニメおたく、コスプレファン、武道修行者、折り紙愛好家、日本文化研究者など。35 回講座を行った。

音楽でリラックス

キューバの人が興味を抱く「和」の文化は教えられないが、趣味の音楽を教え、リラックスを図っている。うまくいっているのではないかと思う。

11 月のビックイベント☆日本語講座の見学会

11 月 23、24 日に私の講座の見学会が行われた。見学者は国際交流基金の中南米担当の駐在員蟻末氏、もう一人は日本大使館書記官の伊藤氏、メキシコから、ハバナから、わざわざこられた。

これに対し日本語講座の主催者であるサンクティ・スピリトゥス大学、グアイアベラの家が最大限のもてなしを計画した。蟻末氏は、学習者たちが楽しそうに勉強している姿が印象的とおっしゃっていた。

見学会の他に日本語や日本文化を研究する講座の枠組み（カテドラ）がサンクティ・スピリトゥス大学教授会で採用されたことを公表する行事があった。

講座の名は私の父の名“松尾威哉（たけや）と命名。経緯は以下の通りだ。

グアイアベラの家の講座風景

サンクティ・スピリトゥス大学講座風景

日本語講座のプロジェクトの責任者であられるマリアエレーナ教授は、父がハバナ大学で実践した 26 年前の活動に強い印象をもち、私が７月に帰国の際、父の生涯の簡単なレポートを欲しいと希望された。

88 歳の父は希望を聞き、激動の昭和、平成における日本の時代背景をベースに自らの人生について 2800 字の文章を３日で書きあげる。

それを教え子のキューバ人、ピータ・イビス氏がスペイン語に翻訳し、９月、マリアエレーナ教授に提出した。

マリアエレーナ教授はこれを熟読、講座の名称を、父の名にすることを決めた。父は、これを聞きありがたいと感激、感謝した。

フィデルカストロの死

セミナー参加のためハバナへ 11 月 25、26 日、27 日３日間滞在する。16 時にハバナに着いた 25 日金曜日の晩 22 時過ぎにフィデルカストロが亡くなった。90 歳。

公の行事は、すべてほぼ中止、国は９日間の喪に服す。テレビは追悼番組だけ。街も国旗は半旗で、陽気な音楽もなく静かだが、想定された混乱はなかった。

街にあふれる観光客は、変わらず楽しく闊歩している。サンクティ・スピリトゥスでは見なかった若い日本人女性の観光グループをいくつも見かける。フィデルカストロは引退しているので、実務にはほとんど影響ないだろうと伊藤書記官はいっていた。

12 月３日　フィデルカストロの遺灰サンクテイ・スピリトウスへ

弁論大会受賞者（中央がサンクティスピリトゥスの学習者）あとはハバナ大学生

Granma

Un revolucionario de talla mundial

¡Hasta la victoria siempre, Fidel!

Decreta el Consejo de Estado Duelo Nacional

Nota de prensa de la Comisión Organizadora

共産党の新聞『グランマ』。フィデル・カストロが亡くなった翌日朝刊。
すべて追悼記事。

日曜日までハバナにいる。追悼の集会かもしれない大きな集団の声が街に響く。歴史的瞬間に立ち会った。

12 月３日、遺灰がサンクテイ・スピリトウスを通る。一般市民の“ジョ ソイ フィデル（わたしはフィデル）”の声のなか見送った。

12 月６日　天皇誕生日を祝う集い

ニュースレターを書かれた伊藤書記官の配慮で日本大使公邸の行事に招待を受ける。

三井物産の方と話す。先月事務所を開設したばかりだそうだ。トランプ発言は実害はないと言っていたが、進出を後らそうとする企業はあるかもと言っていた。

豊田通商は、まだ事務所を開設していない。新車のレクサスを展示していたが、いつ街を走るのだろう。

そこで父の教え子で、行き違いのため 10 年来会えなかったオリガさんに会う。日系人社会がある青年の島の方とも再開。日系人の会の会長であられ商社双日に勤めておられるミヤサカ氏と知り合う。

12 月 17 日　日本語弁論大会

国際交流基金が支援しハバナ大学と日本大使館が行う日本語弁論大会にサンクテイ・スピリトウスの学習者たちが参加。

私は一時帰国中で参加できなかったが、様子を聞く。自己紹介だけのスピーチだったようだが、いい経験になり、来年参加する意欲がわけばと思う。主催者の配慮で特別賞をいただいた。

1 月 17 日　ミヤサカ氏を訪問

日系人の会の会長、ミヤサカ氏の事務所を訪問した。貴重なお話しを伺った。

1．キューバでは 1100 人の日系人がおり、日本語を習いたい需要がある。サンクティ・スピリトゥスには日系人が 35 名いる。日系人の方も受講できたらと願う。住所をいただき調べたら高齢の方、街から遠いところに住んでおられる方が多く、候補は数人のようだ。

2．日本企業はまだ医療関係しか進出しておらず、今年でなく来年ぐらいには動きがあるかもしれないとのこと。経済封鎖もとけず、キューバ人を雇うには制度上の障害もある。

まつお あきら

日本経済新聞社でＩＴ技術者として 30 年近く勤務。2016 年３月に退社後、仕事とは無縁なキューバ行きを決めた。その経緯は、今から 25 年前に父親の松尾威哉さんがハバナ大学に日本語講座を開設したことにさかのぼる。

詳細は本紙 21 号（2016・４・４発行）
11 ページのBOOK『キューバの光と影 ― ボランティア日本語教師三年の記録』参照。

キューバ友好円卓会議への入会・カンパ随時受付中 ♪

キューバ友好円卓会議は、「キューバとの友好推進」、「キューバに関する情報交換と情報発信」を目的に 2003 年に設立され、年1～2回、フォーラム、シンポジウム、講演会などを開催。そのほかハリケーン災害の支援活動、キューバツアーなども行っています。事務局スタッフは全員ボランティアです。

会報『サルー！』の読者約 600 名　■年会費：3000 円

どなたでも入会できます

お問い合わせはFAXかｅ-mailで下記へ

キューバ友好円卓会議　FAX　03-3415-9292

e-mail　cuba.entaku.0803@gmail.com

郵便振替　00100－9-499950　キューバ友好円卓会議

BOOK紹介

108 年の幸せな孤独

キューバ最後の日本人移民、島津三一郎

著者：中野健太　　発行：角川書店　　定価：1700 円＋税

吉田太郎　フィデル･カストロのファン

虫の眼で草の根からキューバや世界のありようを浮き彫りにした快著

この１月に小生の友人、中野健太氏の日系移民から見たキューバの著作が上梓されましたので紹介させていただきます。中野健太氏は高校生のときに初めてキューバを訪れて、英国の大学を卒業した後、キューバの映像制作会社で学び、フリーランスで番組を作っているというユニークなキャリアの持ち主です。

http://www.asianews.co.jp/nakano_top.html

氏は、2008 年にテレビ朝日で放映されたドキュメンタリー「幸せの指標-世界が注目するキューバ医療」を製作されていますが、本書は、番組づくりで登場した日系移民の最後の存命者、島津三一郎氏の取材を中心に、他の日系人の子孫や高校のときからのキューバの友人の日常を軸に、鳥瞰図とは正反対に虫の眼で草の根からキューバや世界のありようを見事に浮き彫りにした快著です。

話が飛びますが、『この世界の片隅に』というアニメ映画が静かな人気を呼んでいます。東洋一の軍港、広島県の呉に嫁いだ「すず」という女性主人公の戦前から戦争中にかけての日常生活がひたすら描く中で、戦争の悲劇と平和の大切さがしみじみと伝わってくる名作です。

広島が舞台となるだけに、ハイライトは原爆投下となりますが、その悲劇もただ遠くにキノコ雲が見え、広島からのラジオ放送が突然途切れるというシーンだけで描かれます。その後、すずは、廃墟となった広島の実家を訪ね、この世界の片隅で自分を見つけてくれた夫に感謝しながら、戦災孤児の少女を連れて呉に戻るのです。

もともと広島出身の漫画家、こうの史代さんの原作を映画化したものですが、映画を作ることに感動した市民も昔の写真をもちよったりして、原爆投下前の失われた広島の光景のディテールがアニメ上で再現されていきます。草の根の市民も参加した新たな反戦・反核映画とも言えます。

広島といえば､チェ･ゲバラもフィデルも訪れており、とりわけ、核の廃絶を願ったフィデルにはこのアニメは見ていただきたかったのですが、中野氏の著作は、この映画『この世界の片隅に』を想起させます。

時代に翻弄される主人公、島津さんとサブ主人公であるキューバの友人の運命を通して、キューバ革命、経済封鎖、そして、スペシャル・ピリオドとキューバ革命の理想の光と陰が静かに伝わってきます。読者は登場人物に我が身を重ねながら、この世の不条理と日常での思いやりの大切さを痛感するに違いありません。

キューバの無料の教育と医療は良き社会を作る鍵

さて、フィデルと並ぶ偉人であるダライ・ラマ法王は「私は社会主義者である。利己主義的な資本主義のもたらす格差社会と環境破壊には未来がない。慈悲の精神に基づくケアエコノミーが必要だ」と語られています。

中野氏の本のタイトルにも入っている「幸せ」の著作でも有名なダライ・ラマの弟子であるチベット僧、マチウ・リカール博士(元フランス出身の化学者)は、最新著作「利他主義」で、こう語っています。

「最新の多くの研究事例から示されているように、利他主義は個人レベルで磨くことができ、社会レベルで奨励することができます。学校において、協力、連帯、慈悲、非差別等の利他主義的な態度を重視した教育を行うことは無意味でありません。ケアを統合した経済開発を想定することは、単なる理想主義ではありません」

キューバの無料の教育と医療は良き社会を作る鍵だ、と中野氏は最後に著作で訴えますが、２年以上のキューバ滞在と取材をふまえ、キューバの欠点も見据えたうえでのこの結論には重いものを感じます。そして、この氏の見解がチベット仏教や最新の脳神経科学からの知見と重なるのも一興です。

キューバの当面の対米要求は経済封鎖の解除

キューバ友好の集いで鮮明に

岩垂 弘　ジャーナリスト

「経済封鎖は深刻な影響」とＩＣＡＰ副総裁

マルコス・ロドリゲス駐日キューバ大使のあいさつ

駐日キューバ大使館主催の「第４回全国キューバ友好の集い」が９月 25 日、東京で開かれたが、集いを通じて、昨年７月に米国と 54 年ぶりに国交を回復したキューバの対米交渉における当面の最大課題が、経済封鎖の解除であることが明らかになった。

駐日キューバ大使館主催の「全国キューバ友好の集い」は、日本の友好団体との交流を深めるための行事。２年ごとに開かれているが、2015 年に開く予定だった第４回が大使館の都合で延び、今年の開催となった。

会場は麹町のエデュスカ東京（全国教育文化会館）。日本キューバ友好協会、全日本民医連、ピースボート、日本キューバ連帯委員会、キューバ友好円卓会議、キューバを知る会・大阪、キューバ教育研究会、キューバ文化交流会などの関係者ら百数十人が集まった。

集いでは、まずマルコス・ロドリゲス駐日キューバ大使があいさつ。次いでこの集いのために来日したアリシア・コレデーラＩＣＡＰ（キューバ諸国民友好協会）副総裁があいさつした。

副総裁は、まず「フィデル・カストロ（前国家評議会議長）は 90 歳を迎えた。彼は常に偉大な日本国民の友人である」と、キューバが日本国民との友好関係促進を望んでいる旨を強調。次いで「今年はキューバ社会にとってと重要な年である。なぜなら、今年４月に開かれた共産党第７回大会で、2030 年までの経済社会開発 15 年計画が採択されたからだ。これは、革命の成果を継承しながら経済改革を進めてゆくという内容である。キューバ国民はこの計画を達成すべく奮闘している」と述べた。

さらに、副総裁はこう言葉を継いだ。

「しかしながら、わが国では米国による経済封鎖が 1960 年代から続いている。こうした不当で犯罪的な経済封鎖によってキューバが受けた損害は 2015 年から 2016 年にかけてだけでも 46 億ドル、トータルでは 1258 億 7300 万ドルにのぼる。このことは、キューバ人の日常生活に深刻な影響を与えている」

「国交回復後、オバマ米大統領は封鎖を緩和したが、それは一部に過ぎない。経済封鎖の撤廃を国際社会に訴えたい。今年も、わが国は国連に米国による対キューバ経済封鎖の解除を求める決議案を提出している。わが国がこうした決議案を国連に提出するのは 25 回目である。来る 10 月 27 日に採決がおこなわれることになっており、決議案が採択されるよう望む。国内では、毎月 17 日を、経済封鎖に反対しグアンタナモ基地返還を求める日とし、全国民で取り組んでいる」

ちなみに昨年の国連総会（193 カ国）では、米国による対キューバ経済封鎖の解除を求める決議案が賛成 191、反対２、棄権ゼロで採択された。反対は米国とイスラエルだけだった。国連総会は 1992 年以来、同じ趣旨の決議を採択しており、今年採択すれば 25 年連続の採択となる。

キューバ国民との連帯を表明

この後、集い参加者による分科会がおこなわれた。テーマは「経済封鎖」「キューバ訪問・ブリガーダ参加」の二つ。いずれもキューバ側の提案で設けられたものだが、テーマの一つに「経済封鎖」が選ばれたのは、キューバ側がこの問題を重視していることの表れと思われた。

集いは閉幕に先立って声明を発表したが、そこには次のような文言が盛り込まれた。

「私たちはキューバ国民との連帯を重ねて表明し、キューバ国民に大きな損害を与えている米国政府による不法で不当な経済封鎖の撤廃ならびにグアンタナモ米軍基地となっている土地のキューバへの返還を求める世界の要求を支持するものです」

なお、集いの席上、キューバ側から、来年はキューバ革命の英雄、チェ・ゲバラの没後 50 年に当たるので、これを記念する国家的行事が来年 10 月８日を中心に２週間にわたってサンタ・クララでおこなわれることが発表された。日本ではゲバラ・ファンが多いだけに、来年は、ゲバラ没後 50 年を記念するイベントへの参加を目指すツアーがいくつも組織されそうだ。

（2016 年 10 月６日付の「リベラル 21」から転載）

ハバナ大学経済学部

オマール・エベルレニ・ペレス・ビジャヌエバ教授
談話録

2016 年 12 月 12 日（月）13:00～14:00　於　日本プレスセンター９Ｆ

まとめ・文責　河内茂幸　キューバ友好円卓会議

ラウル・カストロ国家評議会議長の指揮下で進められている経済改革の主要メンバーであるオマール・エベルレニ・ペレス・ビジャヌエバ教授から改革の現状や展望などについてのお話を伺いましたので報告します。

二重の痛手

フィデル・カストロ前国家評議会議長の死去そしてラウル・カストロ国家評議会議長も 2018 年に引退することになっていることから、キューバは二重の痛手を受けています。

今回の訪日目的

今回は 8 月に来日し、アカデミックな面からいろいろ調査を行っています。日本メーカーは 1970 年代～1980 年代から、日野自動車のバス、トヨタや小松のフォークリフトなどの製品をキューバに輸出しています。トヨタは近々ハバナにオフィスを開設する予定です。医療機器は、レントゲンやラボ用機器を当初から東欧ではなく日本から輸入しています。

社会主義国としてのキューバの政治・経済

現在推進中の経済改革について、経済改革モデル草案策定の当事者として話をします。

どの社会主義国であってもその政治はどこまでも社会のために機能することを大義としており、この大義はキューバでは社会主義による優れた教育・医療・福祉において体現されています。また、キューバはラテンアメリカにおいても国連においても重要な位置を占め、社会主義国としてのその政治は名誉に値します。しかし、経済に関しては、どの社会主義国についても言えることですが、（キューバについても）その社会主義経済が他の経済システムと競合したときに失敗してきたことを否定することはできません。

失敗の原因として、二つの誤謬が挙げられます。一つ目は「資本主義と市場経済の混同」、そして二つ目は「経済主体はすべて国有でなければならないという考え方」です。

キューバの経済改革モデルに基づく市場経済

キューバは経済改革モデルに基づいて部分的に市場経済を導入していますが、この市場経済は社会主義国であるベトナムのそれに近いものです。経済改革は、キューバ国民各個人が労働のなかで満足を感じることができ、労働によって生活のレベルも上がり幸せが感じられるような結果につながらなければ意味がありません。このような趣旨から、経済改革モデルでは労働に対する個人のインセンティブを重視し、しかるべき方向性と目標を定めています。「資本主義と市場経済の混同」という問題については、キューバ社会主義の獲得物である教育・医療・福祉は政府によって存続させ、経済改革のなかで一部に発生している所得格差の問題でも政府が貧者（低所得者層）対策として力を入れて取り組んでいることなどを見ても、キューバが導入している市場経済は資本主義による市場経済とは異なるものです。

国有と非国有それぞれの合理性

ラウル・カストロ国家評議会議長はキューバ経済を構造的に変革しなければならないと考えて、モデルプランの実施にあたってきました。このモデルプランに基づく社会主義経済によって資本主義の場合よりも利潤を上げることができると考えられていましたが、今までのところ功を奏していません。このような経緯から、そして労働に対する個人的インセンティブ重視の考え方から、エネルギーや電話などの基幹部門は国有、食料部門や小規模商売は非国有のほうがよいという結論が出されました。

キューバ若年層の海外流失問題（経済改革の文脈から）

日本と同様キューバでも高齢化が進む一方で、多くの若者がキューバ経済に希望を持てず、米国やヨーロッパに移住しようとする傾向が続いています。若者の海外流

失はキューバ社会にとって大きな損失となり、これを防ぐためにも経済改革を進めなければなりません。経済改革においてどこまでも重要なのは、しかるべき方向性と

目標そしてそれに沿ったプロセスに基礎を置いた経済改革モデルです。

世代別に見たキューバ国民の意識

キューバ国民の世代を意識別に分類すると、1）70～80 歳世代、2）50 歳～世代、3）30 歳 以下の若者世代、の 3 つに分類できます。70～80 歳世代は考え方や意識が固く変化を求めず、50 歳～世代は“Cosa buena”（[良い・望ましい]こと）を知っている世代であり、30 歳以下の若者世代は政治には関心がなく、刺青などで自分の好みを強調する世代です。

世界中に広がっているオタク、漫画、コスプレなどの日本の若者文化はキューバの若者世代にも知られています。

★キューバ関連情報★

キューバ大使館を弔問

カストロ元キューバ国家評議会議長の死去に伴い、駐日キューバ大使館（東京都港区東麻布）は 2016 年 11 月 17 日から 12 月４日まで、弔問を受け付けました。円卓会議としては、11 月 30 日、共同代表の岩垂弘、事務局長の大賀達雄、事務局メンバーの杉本茂樹の３人が同大使館を訪れて記帳し、生花を贈りました。★本誌８ページ左下写真参照

駐日キューバ大使にペレイラ氏

駐日キューバ大使のマルコス・フェルミン・ロドリゲス氏が 2016 年９月末に離任、代わってカルロス・ミゲル・ペレイラ氏が 10 月 22 日に着任しました。 ペレイラ新大使は 11 月 14 日、大使館２階に日本の友好団体代表らを招き、懇親会を催しました。円卓会議からは共同代表の岩垂と事務局長の大賀が出席しました。★本誌 15 ページ参照

今秋 10 月、円卓会議主催のキューバツアーを予定

★関心のある方はメールか電話で円卓会議へお問い合わせください。

第 12 回 メーデー国際ブリガーダ　2017 年４月 24 日～５月８日

★問合せは駐日キューバ大使館へお願いします。

キューバ諸国民友好協会（ICAP）と旅行代理店 Amistur Cuba S.A.は、第 12 回国際ブリガーダへの参加募集を開始いたします。**今回はメーデー、そしてフィデル・カストロ最高司令官へのオマージュ、ならびに英雄的なゲリラ戦士エルネスト・チェ・ゲバラの没後 50 周年を記念して開催いたします。**参加者はボランティアワークに加えて、歴史的・社会的場所への訪問、私たちの現状をテーマにした講演会、様々な政治・社会団体の代表者、キューバの労働者や労働組合員たちとの交流を行います。

interFM897「Vamos a CUBA」（インターネットラジオ）2017 年1月スタート！

毎週日曜日 10:00 ～11:00 放送。キューバ出身のタレントSHEILAさん（写真左）がＤＪを務め「キューバをラジオから盛り上げていきます！」

出演したペレイラ大使（写真右）

写真:「Vamos a CUBA」の公式サイトより

2016 年度収支報告

収入	前年度繰越金	1,814,621	支出	通信費	145,756
	会費	225,000		印刷費	42,072
	寄付	48,005		会場費	94,586
	物販収入	27,000		講師謝礼	175,000
	フォーラム参加費	84,000		雑費	64,315
	利息	132		物品仕入	12,000
				ＨＰ管理料	10,800
				ボランティアセンター年会費	5,000
				振込手数料	324
	計	2,198,758		計	549,853
	※次年度繰越金	1,648,905			